
流砂の行方

飛唯恭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流砂の行方

【Nコード】

N9873Y

【作者名】

飛唯恭

【あらすじ】

砂漠オアシスでの隣国との共同戦線での出会い。

紗那【サナ】煌【キラ】が織り成す物語。

一章？

「短い間ですが、

……宜しくお願いします。」

私は、長老達に引き続き、挨拶を交わしながら、彼に手を差し出した。

握手を交わす為に、手が触れるその一瞬……

ピリツと私の気が反応する。

髪に隠れた項にも、じわりと熱を感じた。

私は、瞬時に自らの気を押さえ込み、表情を変えぬまま彼の手を軽く握った。

2

「こちらこそ宜しく。」

何せ非常時の合同戦線なものでかなり慌ただしいと思います。

長引く戦にはさせないつもりですけどね。」

彼は、一瞬不可解な顔をしたけれども、直ぐに表情を取り戻した。

そして、ほんの少し笑みを浮かべる。

【白金の豹】

国を越え評判が高い、名だたる魔騎士。
父親の死後、名付けられたその呼び名は、父親譲りの白銀の髪と通り名に因んだものだった。

亡き【白銀】の子は、若豹の如くしなやかに戦場を駆け回り、敵陣を混乱させた。

夕【ユウ】の国の一番の戦士。その名は、【煌】キラ

……決して、水の女神の御加護を利用されぬ様、気を引き締めよう。

……もう、二度とあんな事が起こらぬ様に。

それが、私の第一印象だった。

同盟国の夕【ユウ】国、月【ツキ】国は、離反した果【カ】国との戦に総力を上げていた。

両国の、魔騎士と呼ばれる様々な術を扱う騎士は、果国に近い砂漠に拠点を決めた。

月国で、最強と呼ばれる部族が住む土地だ。

岩肌をくり抜いた住居と、緑に囲まれた泉を持つオアシス。

普段ならば、商人が行き来する砂漠の街道も、今は物々しい雰囲気となっっている。

魔騎士とは、王に従属する騎士とは違い、裏部隊の役目も持つ。

裏部隊と言えど、王宮騎士団と変わらぬ、いや実際には名だたる腕の者達は魔騎士に多い。

独自の力を持つ部族、一族が国から仕事を請け負い、独立した村を持ったのが始まりだからなのだろう。

華々しい王宮仕えの騎士では無く、己の特徴を生かし鍛練し、民間人からの小さな仕事も熟しながら成長するのだ。

紗耶【サヤ】は、その里の薬師としてその場に呼ばれていた。

身体を巡る気を読み、自然の気を取り入れ、治癒を高める能力に長けているからだ。

普段は、薬の材料を集める名目で、気ままに国を渡り歩き、この里から少し離れた岩場に家を構えている。

近親の者も少なかった上、両親も、幼い頃亡くなったが、信頼高い薬師の家系の者を、周囲の者は雑な扱いなどする訳も無い。

定期的に里の医局に顔出しをする事、大掛かりな仕事の呼び掛けを守る事を前提に、自由な行動を許されているのだ。

薬師と言えど、並の男には負けはしない。

薬学に通じると言うからには、治癒だけではなく、逆の意味…則ち、死にも通じる。

裏部隊の更に裏。

影と呼ばれる者としての役割も紗耶の両親は務めていたらしい古くから伝わるあらゆる知識と技を叩き込み、鍛え上げられた娘が彼女だった。

そして、彼女は部族の巫女としての顔をも持つ。

火風水土雷。

一通りの術以外は、己の気と相性の良い属性を見つけ、特性を伸ばすのだが、稀に複数の属性に秀でる者もいる。

更に、不定期にだが、全ての属性に秀でる者が出現すれば、その者は神に通じる者としての教育を施されるのだ。

強大な力を私欲に使わぬよう、無駄な争いを起こし、部族を滅びに導かぬようにと。

部族の者も、暗黙の了解だが、特別視し崇めたりはしない。

砂漠の住人の気質も大きく影響するのだろう。

自然を侮れば、自ら滅ぶ。

そういう意味では、夕国も気質が似ていると言える。

白金の豹、煌【キラ】の部族は森を中心とした土地に代々住まう者達だった。

山の恵に恩恵を受け、感謝を抱く者。

反対に、果国は砂漠と海に面する国。

貿易により繁栄した国なのだが海の恩恵に溺れ、国内は腐敗し始めていた。

新興の国で、魔騎士の一族が王族でも有り、民の格差が激しく富と権力への執着が同盟国離反を招いた。

国の対立に加え、魔騎士としてのプライドを掛けた戦にもなる

果国は、最新の兵器を取り入れ魔騎士の力を増幅していた。

中には人体そのものを犠牲にし気を取り入れる兵器まで、新たに開発された。

禁じられた領域に踏み込んだ権力者の暴走により、予想外に拮抗した争いとなった。

精鋭の魔騎士達が、一気に片を付ける為、続々と集められる。

中でも、煌が到着した事で夕国のみならず月国の魔騎士の士気も向上した。

生きる伝説の魔騎士を間近で見共に戦えるのだ。

作戦本部となった天幕に、一陣の風が舞い煌が姿を現した。

しなやかな筋肉を細身の黒い上下と足首までのブーツに包み、武器を収納した同色のベストを羽織るのが普段の戦闘服だ。

片目を黒い眼帯で押さえ、頭から砂漠の民が好んで羽織る、足元までの長さのマントを被っていた。

黒の中、藍色の瞳と、白銀の髪が僅かに覗くのが強烈に印象を残す。

「おお、煌！

お前の言う通り、あの間者は泳がしたままにしたが、成果はどうだ？

「皆は、戦線でのお前の姿を期待して落ち着かないんだがな。」

夕国の右腕と言われる史也がにやりと笑い、煌の肩を叩く。

三十代半ばだが、戦線で鍛えた身体と頭脳は、まだまだ若い者には引けは取らない。

寧ろ、年と共に政治的手腕を重ね、王宮仕えを望まれる程になっていた。

「ああ、予想通りかな。

奴ら、相当洗脳されてるみたいだね。」

下手したら、果国の王宮乗っ取られてるかもな。

早速、【黒闇】の屍人にご挨拶されちゃったよ。」

まるで、街中で友人にでも会ったかのように、のほほんと答える煌。

「屍人……ですか？

あの禁術を操る者で【黒闇】、所謂、魔騎士を抜けた者となれば、限られています。」

その上……あの男は完全に死んだ筈。

その骸を確認したのは……当時の長達三人ですが。」

月国の参謀の紫亜が静かに答えた。

彼は、砂色のマントに身を包み褐色の肌に映える、栗色の髪をぴったりと後ろで纏めている。

「ん、確かに死んだ筈なんだけどねえ。」

黒闇の探究心旺盛な奴らが、結局行き着くのは闇の魔導師。

気のみならず、生命を操る事。

あれで終わりじゃなかったって事じゃない？」

その場に居た者が、仲間同士互いに眼を合わせ、次第に顔を曇らせた。

禁忌を求め魔騎士を抜けた者を《黒闇》と総称し、術を極めた者の尊称が魔導師だ。

更に《闇の》と付くとなると、その人物は絞られる。

「屍人と言っても、只の操り人形にしか思えない稚拙な奴だったかな。

その程度だか、裏が有るかまでは、まだ判らないって感じ。」

煌は、砂埃の着いたマントを脱ぎ、天幕奥に用意された椅子に座り足を伸ばした。

「紗耶ですが、失礼してよろしいでしょうか？」

天幕外から声が掛かった。

「何か有ったのか？」

紫亜の声に、

「夕の方が、屍人の骸を持ち帰られたのですが…腑に落ちない事が

ありまして。」
と、応えが返る。

「入って貰って構わないんじゃないですか？
俺は、ぜひ聞きたいね。」

「ですが、薬師の娘に何が……」
比較的年若い夕国の者が訝し気に言うのを、紫亜が遮った。

「彼女は、只の薬師ではありません。」

寧ろ、我々よりは遙かに優れております。

紗耶、中へ。」

扉布を分け、紗耶が天幕へ入って来る。

象牙色の滑らかな肌を、黒いマントに身を包み、漆黒の髪と、黒耀石の瞳を持つ娘。

物怖じする気配などまるで無く軽く頭を下げ、皆に挨拶をする

「会議の最中、申し訳ありません。」

手短に言わせて頂きます。

二体の骸は、似て異なる物。

あの屍人は、死人に気を注ぎ込み操られた物と……新たに造られた物とがありました。」

「新たに…とは？」

煌が、すかさず問い掛ける。

「生成、人工的に造られたと…見掛けと違い、内臓などは綺麗なものです。」

どう考えても、生きて活動していた痕跡が無い。

生まれたたえと言ってもおかしくはありませんでした。」

「あゝ、悪い予感してきたな。下手したら、果国で実験室が仕上がってるって事？」

「兵器に使用する気を抜いた死人を、兵力には活用している可能性は充分あります。」

生成は、未知数としか…」

他の者は、二人の会話に聴き入り、しばらく沈黙していた。

そんな中、史也が沈黙を破り

「その屍人の、一番の弱点は掴めてるのか？」

直ぐに、魔騎士の対立じゃなく国を上げての戦となる。

出来れば、国の駆け引きで、面倒になる前に決着を着けたいのが本音だからな。」

「……最強の方々が集っているのは、とても心強い事です。」

あれは、血液代わりの体液に、気を練り込み注入しています。その気を分解、破壊すれば活動は止まります。

屍人の兵と傀儡となつている果国の主要人物を叩けば、影の者は引くのではないでしょうが。

国を乗っ取るのが目的ならば、違う手段で、内密に事を運ぶのではないかと。」

「只の暗闇の術師の力ならば、我々が勝ると言つ訳です。

だが紗耶…影とは術師では無く魔導師が関わっているのか？」
紫亜の言葉に紗耶が頷く。

「魔導師と呼ばれる者でなければ、人体の培養は無理です。
私を知る限り、せいぜい口寄せの生物の培養、生成に稀に成功する位ですから。」

煌は、手近に有つた水差しからグラスに水を注ぎ、くすくすと小さく笑いながら紗耶に問い掛けた。

「ねえ、彼女はどれだけ世間を知つてるのかな？
まさか、このオアシスで出会つた術師とかの話だけで憶測してたりしないよねえ？」

後、長老達に聞いたとかさ。」

彼の言葉に、夕国の面子も僅かに苦笑いを浮かべていた。

確かに仕方ない事だろう。

女性の魔騎士もいない訳では無いが、彼女からはそんな匂いは感じられない。

仮に魔騎士だとしても、最前線ではなく医療班だろうと夕国の誰も思った。

今まで表情を崩さぬまま対応していた彼女だが、小さく笑い、ふうとため息を着き、煌に答える。

「信用して頂けない様で残念。構いませんよ。」

放浪先では、散々夕姫様から

『見た目で舐める男は、器の小さい奴だから構うな』と、言い聞かされましたし。」

月国の面々は、慣れた事のように素知らぬ顔をしたままだった。

先程までの張り詰めた空気も少し解れ、立ったまま話を聞いていた若い者達も、それぞれに空いた椅子や、柔らかなクッションが敷き詰められた場所に腰を下ろし始めた。

一方、落ち着かないのは夕国側だ。

現在の女長【夕姫】

森の巫女の孫である女傑の長の名が、何故彼女の口から出るのか？

煌以前に、伝説と誉れ高い夕姫は、確かに長になるまで放浪していた期間が有る。

秀でた魔騎士の女長が、

『構うな、ほっとけ、器の小さい奴はな』

と、女性に言うとしたら、相当腕を見込まれている事に他ならない。

艶やかな肢体と溢れる色香。

明朗快活の姐御肌だが、気の短い夕姫は、宿場町で違う意味での伝説を残す強者。遭遇した、任務中の裏部隊が、色香を凌ぐ余りの豪快さに、陰から涙したと言ったのは一人どころではない。

「……………ああ……………、うちの長とも面識が有る訳なんだねえ。

……………結構、腕も起つ訳…か？」

煌が片手で頭を掻き、訝し気に紗耶を見た。

「程々には。」

そう言うつと紗耶は、傍らの紫亜に視線を移した。

「私が言ったのは真実です。

砂漠の巫女は柔ではない。

裏の薬師直伝の、元裏部隊の精鋭でしたから。

この意味お解りですね。」

『『巫女だと……………？』』

煌を始め、夕国の面々が声を上げ、改めて彼女を見た。

煌は、巫女という言葉に反応し納得したという感じで軽く頷いた。

「ならば心配無用って事だ。

しかしねえ…夕姫様といい、巫女の血を持つ二人が放浪好きって、

他国が聞いたら驚きだよな

まあ、奥深く守護された巫女よりも、我々には誉れだ。

……失礼しました。」

「夕と月の巫女は、神の恩恵に溺れぬ様にと教えられ、鍛練されま
すからね。

他国の巫女とは、かなり違いますよ。

夕の方だからこそ、すぐに納得して頂きやすいかと。
ですが、いらぬお気遣いは無用です。」

紗耶は、何食わぬ顔で微笑み、一同に頭を下げた。

月の長老の一人が、

「紗耶が前線に出ぬようになったのは、我々の願いもあつたからな
のです。

巫女の治癒が失われぬように。

戦場では、部族の存続に繋がりますからな。」

と、しみじみと語る。

「さてと……。

本題に戻り、作戦を詰めましょう。

国境の前線から、王宮まではそう遠くはありません。

果の王宮内部を早く把握しなければ、無駄に屍人を増やすだけにな
ります。」

その、紫亜の声に紗耶が続いた

「……………死んだ者も、安らかな眠りに着いたほうが幸せですよ。……………
…きつとね。」

慈悲とも、苦笑とも取れるその笑みは、その場にいる誰よりも老成して見えた。

？

砂漠の中、砂埃を巻き上げ戦は続いている。

国境の戦線を叩き潰し、果国の城下街も目に映る範囲となったが、街に全く人気は無い。

戦に脱出したというよりは、生活臭も無く澱んだ感じすら受ける。

遠目に見える石造りの武骨な城は、更に空気が澱み、死臭さえ漂いそうな感じだった。

街の手前にある離宮から屍人を送り出していると判明し、煌を中心に突撃を掛けている。

水、風、雷を得意とする者の共同戦線を背後に備え、屈強の魔騎士達が地を駆ける。

様々な属性を纏った武器を持ち鍛練された肉体は、気を集め一蹴りで宙を舞う。

土を操る呪文が唱えられ、屍人とおぼしき虚ろな眼をした兵達を巨大な蟻地獄が飲み込んだ。

口寄せの呪文に、巨大な砂漠の蠍がすり鉢の底に集い、屍人を砂に引きずり落とす。

煌は、両手を胸の前に突き出し「風よ渦を巻き刃となれ。我が手に集い宙を切り裂け。雷を伴い！」と、力強く叫んだ。

その声に応じ、眩い稲光が炸裂し、竜巻が屍人を巻き上げる。

屍人は、気味の悪い唸りを上げ、感電しビクビクと跳ねる四肢が、胴が風の刃に散らばってゆく。

術の発動と共に、詞を唱えるのは精度を高める為でもある。

煌の腕ならば、普段は短い言葉一つで気を操る事が出来る。だが、この場では速やかに王宮に乗り込む為と、仲間の術力を温存する為集中する事を優先させたのだ。

「あゝあ、こりゃあ街の人間も屍人にされてるっばいよね？

女子供の姿な無さ過ぎるのも…嫌な予感。」

左目の眼帯に掛かる銀髪を払い、煌はぽつりと言った。

紫亜が、「多分、生気を搾り取られてるのしょう…。この屍人の気は、雑多過ぎます。」

紗那が言っていた、生成された死体に残っていた気とは違い過ぎる

…」と言いながら、辺りを見渡した。

並の兵士と同じ位、屍人は兵力にはなっていたが魔導師級の者とは思えない。

魔騎士の中には、気の緩みからか軽口を叩き始める者達もいた。

そんな中、上官達は何かを探る様に気を巡らせ集中している。

「来るぞ！足元に注意しろ！」

煌の怒号と共に、砂が濡れた様に色を変え染められた。

「水か?!」

史也の声と同時に、周囲の魔騎士達の絶命の音が響いた。

ぐわあっ！と声を上げながら、砂から生えた触手に締め上げられた身体はみるみる内に干からび、地面に放り出される。

かと思えば、あちらでは双頭の大型獣が鋭い牙を向き、何人もの人間を食い散らかしていた。

水を吸い込んだ様に見える場所のあらゆる所を移動し、うねうねと

触手が伸び、大型獣が突然姿を現わす。

それらは、意図的にも取れる程に、煌達、上官を残し部下を仕留めてゆく。

「燈される火に我の力を注ぎ豪火となりて焼き尽くせ！」

紫亜が、指先に燈した炎に片手を広げ翳すと、触手に向かい炎を放った。

濡れた砂に沿い、轟々と激しい朱い色が辺りを包む。

それは臭気を上げ、焦げた触手をぼろぼろと砂に撒き散らし撤退するが、違う場所に広がり再度仕掛けてくる。

「先に気を搾り取るだけ搾り取るって事か！

…姑息だね。」

上官は生かしといて…何するつもりなんだろうね？

人体実験？」

「煌！お前、何言ってるんだ！

だとしたら、お前が一番弄られるだろうよ！」

史也が、部下に襲い掛かる触手を、剣で薙ぎ払い叫んだ。

それは、ぐるりと円を作り魔騎士を取り囲み挑んできていた。

中心にいる上官達が様々な術を発動し、部下を助け出すのがキリが無かった。

「屍人の体まで食い尽くしてます。

最初から、これが目的だったのでしょう。」

紫亜は、そこ此処に炎を強風に寄せ、対抗しながら言った。

「今の水風雷の総力じゃ足りないって事か。

史也…念の為呼んだ、夕姫様の治癒班も着く頃だよねえ?」

手を伸ばし、雷を放ちつつ、高速の風水の刃で大型獣を幾度も切り刻んでいる煌。

円を縮めぬ様、地を翔け雷気を帯びた刃も奮い、術を発動しながらを繰り返す内に、大型獣の形成が僅かだが鈍くなっていた。

「こいつを殺さなきゃ離宮も潰せない。

治癒班が来るなら、一、二日は史也達で踏ん張り効かせてくれるよね?」

「煌殿、何をなさるおつもりですか?」

紫亜が、首だけ向け問い掛ける。

「動きが鈍くなつてはいるけど、まだ…ね。

皆！水風雷の気持つ者以外は結界の詞を唱えろ！
土の奴は、地面に結界強化を施せ！」

夕国月国、両方の者が煌の声に驚きつつも、すぐに命に従う。

煌が、素早く片手で眼帯を外す。

現れたのは、金色の瞳。

夜の空に煌めく満月。

「煌！今、外してどうするつもりだ！」

「あれが噂の霊眼…！」

史也と紫亜が、思わず声を上げる。

《霊眼レイガン》

精霊の恩恵に恵まれし証。

だが、寵を受けるには鋼の様な自制心が不可欠なのだ。

体力精神力を消耗する為、発動しない者、出来ても身を滅ぼす者の
方が多い。

「これがオアシスまで来ると余計に厄介だからさ！
来た！」

煌は結界の宙を翔け、結界外へと飛び出す。

そして、大型獣の双頭目掛け、刃で雷撃を食らわした後に、砂に刀を突き立てる。

「精霊よ天から集いて雷を放ち、器を亡くした気を払いたまえ！」

急速に雲が空を覆い、眩しい稲光が獣と地を目掛け突き刺さる。

先程の共同戦線での術とは威力が違う。

魔騎士達は、詞を唱えながらも、その光景に目を奪われた。

凄まじい咆哮を上げながら、大型獣は触手へと形を崩した。

砂の上を這い纏わり、ふと動きを止め……一瞬の内に一カ所に集ま
ってゆく。

やがて、煌が刀を刺した延長線上の砂が、一気に山と為る。

それは、巨大な蛇にも似た黒い影だった。

今にも怨念の音が聞こえそうな、人の気で練り上げられた影。

素早く煌の周りを囲み、大きく開けた口からどろりとした液体を吐き出す。

「風！」の声で、跳ね返る液体は本体へと戻る。

煌は、じっと頭部を見つめ、刀を抜き叫んだ。

「理を曲げ形を取る水よ、雷を巡らせ風となり散れ」

渾身の力を込めた刀が、頭部に突き刺さる。

それは断末魔の声を上げ影は霧散し、黒い霧が辺りを包んだ。

「見つけたぞ！」

煌は、刀を放った場所へ駆け寄ると、霧の中の蠢く影を蹴り上げた。

「ぐはあっ！」

……っ、がはっ……！」

黒いフード付きマントに顔を隠した男が転がっている。

片手で襟元を掴み上げ、

「只の術師か。」

傀儡にされたか？」

と、小さく呟く。

ばさりとフードが落ち、顔が現わになった。

骸骨にも似た、痩せて枯れきった顔は、苦しげに目を見開き、ばくばくと口を開け閉めしている。

「さっきの蛇に潜んでた時とは大違いだねえ。」

「こんなにちんけな気の持ち主じゃなかった筈なんだけど。」

男は、いきなり大きくのけ反ると静止した。

『…霊…眼……』

その身体と共に頂くとするか』

突然、冷静な声が、その口からはっきりと流れ出た。

「何…！」

骸骨紛いの落ち窪む眼に、ふわりと浮かぶ金色。

煌は、濃縮された影に全身を包まれた。

まるで、ゼリーのようにはるはると震える影。

全身を検分するように、気を探られている。

……こいつの本体は何処だ？

さっきは確かに術師から気を感じた筈なのに。

自由自在に操れ、乗り移るのか？…死体じゃなくても。

その上、霊眼で術を使ってる俺を抑え切れるなんて…一体誰だ？…
……

煌は、考えを巡らせながら、自分も探りを入れていた。

影にどんどん気を吸収され、拘束がきつくなつてゆく。

『……申し分無いわ。』

ここまで…見事に育つとはね…上出来』

「残念だね！」

「まだ、余力はあるからさ。」

勘に障る男の台詞にむかつきながら、詞無しで術を発動する煌。

煌の発する気と拮抗する程に、影も吸収を止めない。

闇に浮かぶ金色の二つの瞳を、煌は睨み返す。

「はぁーっ！！」

「闇を裂け！！」

徐々に拘束が緩み、金色の瞳がぼやけ始める。

すると、襟元を掴んだ手にも力が戻り、煌は自分と男の身体を水の気で覆い込み、影を爆発させた。

精霊の気を受け、全身から力を解放する。

砂を舞い上がり、激しい爆発音が砂漠に響き渡った。

黒い霧は風に吹き消され魔騎士の結界が煌の視界に入った。

彼は、どさりと術師の骸を砂に放り出すと、地に刺さった己の刀を抜き腰に納めた。

「煌！大丈夫か?!」

「「煌殿！」」

夕国月国、両方の者が結界を解き、急ぎ駆け寄った。

ふうと息を吐き、

「なんとかね。」

でも、大分、力を持っていかれちゃったけど。」と言いながら、砂の上に大の字になった。

「黒い霧に包まれてしまい様子は見えませんでした。とてつもない精霊の力が集まってました。

さぞやお疲れになった事でしょう。」

紫亜が、煌の脇にひざまずき話し掛ける。

史也は、「あの骸とやり合った訳か？」と、煌に聞いた。

「あれも傀儡。」

後ろにいる奴の力も侮れないぞ。

霊眼の俺の力を、あれだけ吸収しながら、抑え込む芸当が出来るな

んて……初めてだよ。」

闇に光る金色の瞳。

術師の瞳とは違う。

ならば、あれは魔導師のものなのか、それとも只、術で光を帯びていただけなのか……

下手に口に出しても面倒かもね。

夕姫様に報告してからにするかな。

煌を囲み話を聞く傍ら、部下はオアシスに運ぶ手筈を整える。

「今は、攻撃も屍人の姿も見えません。

偵察に行った者に寄れば離宮には生きている者の気配は無く、酷い有様だそうです……」

ゆっくりとだが、問いに答えていた煌の顔色が次第に蒼白へと変化してきた。

「やば……いかも。

なんでだ？

急に…力が無くなっ…てきた……」

「もういい！喋るのはよせ煌。

治癒班が早目に到着したそうだ。

一先ず、身体を休める。」

「……ん、了解……」

煌の瞼が落ち、がくりと首からも力が抜け、気を失った。

担架に乗せられ、個室を設えた砂橇に運び込まれる煌。

風と土の能力が有る二人組が操作する橇は、砂漠の中をゆっくり滑りオアシスに向かう。

それを見送り、上官達は簡易の天幕で話を続けていた。

「霊眼を使い過ぎると負荷が凄い。

だが、回復専門の治癒班が居れば数日で戻る。

俺達も、気を抜かず対応しなくてはな。」

史也の言葉に、一堂は頷いた。

「あの術師についても調べるよう手配しました。
傀儡と言えど、何か繋がりが見つつけられる様にと骸を連れ帰った筈
でしょうから。」

「ああ、そうだろうな。」

紫亜殿、離宮の搜索も今日の結界を張りながらにしないか？

下手に散らばるよりは得策だろう。

痕跡から、内部の様子を掴むに越した事は無い。」

「同感です。」

この戦、ただの侵略より、遙かに根深い物が有りそうです。

他国が何か嗅ぎ付ける前に、我々が確実な情報を知っておかねば。
国を揚げての戦のきっかけなど、作らせはしません。」

紫亜の声に、皆も賛同の声を上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9873y/>

流砂の行方

2011年11月30日00時51分発行